

◎トルコ総選挙、親イスラム与党が勝利 単独政権を維持

【朝日新聞、06/13/2011】トルコ総選挙（定数550）が12日に投開票され、親イスラム与党・公正発展党（AKP）が前回は3.32ポイント上回る49.90%の得票を得て勝利し、3期連続での単独政権維持を決めた。ただ、新憲法制定を提案できる330議席にはわずかに届かない模様だ。

エルドアン首相は12日夜、首都アンカラで「民主主義が勝った。勝者は国民全員だ」と勝利宣言。新憲法については「野党と協議し、理解を得ながら作業を進める。我々はあきらめていない」と述べた。AKPは軍政下の1982年につくられた今の憲法に代え、より民主的な憲法の必要性を訴えており、大統領制への移行が検討課題だ。

民放NTVの13日午前11時（日本時間午後5時）現在の非公式集計（開票率100%）によると、各党の予想議席はAKP326（現有331）、最大野党の共和人民党（CHP）135（同102）、極右・民族主義者行動党（MHP）53（同72）、無所属36（同20）。

◎トルコ総選挙、少数民族クルド人が躍進 権利拡大要求へ

【朝日新聞、06/18/2011】トルコ総選挙（定数550）で少数民族クルド人の無所属が躍進し、今後のエルドアン政権の対クルド政策が注目されている。クルド人側は新国会で権利拡大の要求を強めるのは必至。新憲法の制定を課題とするエルドアン政権もむげにはできず、駆け引きが強まる可能性がある。

投票が12日にあった総選挙でクルド人の無所属は36議席を獲得。全員がクルド系政党・平和民主党（BDP、改選前20）に合流するとみられる。トルコの政党は全国で10%以上の得票がなければ国会議席が得られない。「死票」を出さないため、BDPは全員を無所属で立候補させた。

BDPのデミルタシュ党首は選挙結果について「満足している。人々の自由を求める声が強まった結果だ」と述べた。悲願とする公立学校でのクルド語教育の実施や、クルド人による自治要求を強める動きに出るのは間違いない。

【キーワード】 世俗主義（ライクリック）、イスラームと民主主義、トルコのEU加盟問題

（授業の中で参照）

キリスト教原理主義

キリスト教原理主義は、多様な原理主義の一形態でありながら、用語法から見ると、原理主義の原型としての役割を果たしてきたと言える。そもそも、原理主義者という言葉は、1920年代、米国において、キリスト教保守派が進化論や近代的な文献批評学と対決するために用いた「自称」

であった。その呼び名は、1910～1915年に刊行された「根本的なもの——真実への証言」(The Fundamentals: A Testimony to the Truth) という12巻の小冊子のタイトルに由来する。そこでは、聖書に記されていることを「文字通り」に受け取ることが、守るべき根本的態度として確認されたのであった。この時代以降も、米国においては保守派とリベラル(自由)派の両極が突出した形で現れやすく、両者の動向を観察しやすい。両者の間に生じる緊張関係は、世界の各地でその相似形が見られるが、国際社会に対する影響力という点においても、米国における原理主義的動向がモデルとしての役割を果たしている。

もともと神学の専門用語であった原理主義という言葉が、一般に流布するきっかけの一つとなったのが、1925年、テネシー州で行われた「スコップス裁判」であった。この裁判では、進化論を公教育で教えることの是非が争われた。進化論を教えて訴えられた生物学教師スコップスは敗訴したが、結果的にこの裁判を通じ、原理主義の考え方は、科学に反する前近代的思想として嘲笑的であるとされていった。

ところが1960年代以降、こうした動きに変化が現れる。カトリックでは、第二バチカン公会議(1962～1965年)において様々な変革が提示されたが、それに対し、変化を拒絶し、伝統的教義に立ち返ろうとする人々が「原理主義者」と呼ばれるようになった。プロテスタントにおいても、同様の価値観を持つ人々が原理主義者と呼ばれたが、カトリック、プロテスタントいずれの場合も、原理主義者は、以前のように時代錯誤的なイメージの中にとどめることのできない社会的影響力を持ち始めることになる。原理主義は、社会の道徳的退廃を批判し、伝統への回帰に新しい共同体秩序を求めようとする宗教復興現象の担い手としての地歩を固めていくことになる。そして、リベラル派との対決姿勢を強める中で、キリスト教保守派は、1960年代以降、自らを「福音派」と呼び始めた。福音派の中でも、特に政治的関心の強いグループが原理主義者であり、今日の米国では、キリスト教原理主義者は、しばしば「宗教右派」とも呼ばれる。

かつて政治への関与に消極的であった原理主義者は、1960年代から1970年代における政治的混乱を経る中で、「神の国」としての米国を再建することこそが建国の理念にかなうと考え、政治の世界に積極的に関与していくようになる。1980年代に注目を集めた組織として、ジェリー・ファルウェル率いる「道徳的多数派」をあげることができる。こうした全米規模の草の根運動は、パット・ロバートソンによって1989年に設立された「クリスチャン連合」や、ビル・マッカートニーによって1990年に設立された「プロミス・キーパーズ」などに引き継がれて、今日、多様な層をなしている。

以上のように、1920年代の原理主義が神学的概念であるのに対し、1980年代以降の原理主義は政治的概念としての色彩が強い。現代において、原理主義を核とするキリスト教保守派は、同性愛、フェミニズム、自由主義的な福祉政策、相対主義、寛容、政教分離といったリベラル派が擁護しようとする価値観に対し、しばしば批判的な態度をとる。また神学的には、千年王国思想を重視し、この世を善と悪の戦いの場として見なす傾向が強い。こうした傾向は、敵を誇大視し、善悪二元論を前提とする昨今の米国の政治姿勢にも一部反映されていると考えられる。

(小原克博「キリスト教原理主義」、井上順孝編『現代宗教事典』より引用)



Overview

- 近代化という文脈
- 世俗化と世俗主義
- 原理主義
- イスラーム復興運動の源流

近代化という文脈

- 「世俗化」は社会の「近代化」の副産物。
- 非欧米諸国（特にイスラーム世界）では、近代化（**modernization**）と西欧化（**Westernization**）が意識的に区別されてきた。欧米以外の多くの国は、西欧化＝**植民地化**という歴史を持っている。
- 近代化や西欧化によって引き起こされる変化に対する抵抗原理として「**原理主義**」を位置づけることができる（**広義**）。
- ユダヤ教・キリスト教・イスラームそれぞれの内部に存在する多様性（多様な集団）は、世俗主義および原理主義からの距離によって計ることができる（**多様性理解の指標**）。

世俗化（secularization）


- 宗教が社会に及ぼす影響力の低下。**西洋のキリスト教社会**がモデルとなっている。
- もともとこの言葉は、宗教改革の時代に、教会の財産（土地や建物など）を行政に譲渡することを指して用いられ始めた。そこから、土地などが教会の支配から解放されるのと同様に、社会や文化が教会権力から解放され、キリスト教の影響が次第に減退していく現象を広く世俗化と呼ぶようになった。
- 1980年代以降、世界的な「**宗教復興現象**」が起こることによって、世俗化論は根本的な見直しを迫られることになった。

世俗主義（secularism）

- 世俗主義は**政教分離**とほぼ同義に用いられてきた。
- 政教分離の前提
 - **私的領域**と**公的領域**の分離
- 政教分離の多様性
 - 分離のあり方をめぐる論争

原理主義（fundamentalism）

- 広義の理解
 - 近代化・世俗化に抵抗しつつ、それを超える文明論的な原理を掲げる思想的・政治的な運動。
 - アジアの近代史においては、原理主義的運動はしばしば**ナショナリズム**と結びついた。広義の理解を踏まえることによって、異なる時代や地域に通底する共通要素を洞察することが可能となる。
 - 例：ガンディーの**非暴力抵抗運動**
- 「広い意味で理解すれば、原理主義は、急激な時代の流れに巻き込まれたときに自らを押しとどめようとする「慣性の力」であり、また同時に、様々な堆積物によって流れがせき止められようとしたときに、それを決壊させる力でもある。」（小原・中田・手島『原理主義から世界の動きが見える』159頁）



原理主義 (fundamentalism)

- 狭義の理解
 - ファンダメンタリスト (原理主義者) という言葉は、もともとは1920年代に、キリスト教保守派が進化論や近代的な文献批評学と対決するために用いた「自称」であった。その呼び名は、1910～1915年に刊行されたThe Fundamentalsという12巻の小冊子のタイトルに由来する。→別紙「キリスト教原理主義」参照
 - しかし、ホメイニーによるイラン革命 (1979年) 以降、警戒すべきイスラーム運動に対して原理主義という言葉が転用され、原理主義といえば、「イスラーム原理主義」を指すようになった。そこには前近代的なニュアンスが刷り込まれている。イスラーム世界では「イスラーム主義」「イスラーム復興主義」などの言葉が用いられる。



イスラーム復興運動の源流

- ムスリム同胞団
 - 西洋 (イギリス) からの独立とイスラーム文化の復興を目的として、ハサン・アル=バンナーにより1928年に設立。イスラーム的価値に基づく、幅広い「世直し運動」。非合法とされてきたが、実質的には最大野党。穏健派が主流であるが、1970年代以降、「イスラーム集団」「ジハード団」など急進派少数集団が分離。ハマスも、同胞団のパレスチナ支部として出発している。
 - 2011年6月6日、同胞団による「自由公正党」が政党として承認される。→ CISMOR Interviews 「革命後のエジプトの現状と課題」
 - 現在では、教育歴の高い若い世代が組織をリードしている。内部では世代間対立があるが、表面化はしていない。

参考文献

- 松本健一『原理主義』風人社、1992年。
 - 原理主義を特にナショナリズムとの関係で広義に解釈し、多様なテーマを包括している。日本近代史に関する分析も興味深い。原理主義を本格的に問うた先駆的書物である。
- 臼杵 陽『原理主義』岩波書店、1999年。
 - 原理主義に関する国内外の先行研究を幅広く視野に入れながら、原理主義という用語の有効性を緻密に検証している。具体的な考察対象としては、ユダヤ教原理主義が中心となっている。
- 小川 忠『原理主義とは何か——アメリカ、中東から日本まで』講談社、2003年。
 - 米国、エジプト、イラン、インド、インドネシア、日本を対象に原理主義的運動の事例を幅広く紹介し、その特質と変容を描いている。
- 小原克博・中田考・手島勲矢『原理主義から世界の動きが見える——キリスト教・イスラーム・ユダヤ教の真実と虚像』PHP研究所、2006年 (PHP新書)。
 - 一神教の特質を問いつつ、原理主義をめぐる言説と現実を批判的に考察している。